

徐々に陽が傾いてきてはいるが、ロインとの約束の時刻まで、まだ少しある。

合流を果たした一行は、せっくなので街の西にある学生寮まで大回りして向かうことにした。

「宿、普通にとれたんだな」

「いや、結構ざりざりだったよな。ほとんど満室でさ」

路地を行きながら、リアムが言う。

「うん、やっぱり前夜祭の影響が大きいみたいだよ。こんなにお客さんが来るのも初めてだって」

「雑貨あげたら宿代安くしてもらったしな」

「さすがは俺が見込んだ仲間たち！」

そんな歩きながらの三人のやりとりを、ノアはぼんやりと見つめていた。

そうして路地を行っていると、そのうち円形の広場に出た。

学園のものより幾分も大きい広場だ。中央には時計が立っていて、それを囲むようにいくつかのベンチが並んでいる。石畳の上を、風船を持った子どもたちが駆けている。馬のオブジェの脇で、白髪の老人が鳩に餌をやっている。

そんな広場のある一角に、数十人の人だかりができていた。

「あれ、なんだろ？」

リアムが好奇の視線を向ける。

「何かやってるのかな？」

「行ってみようぜ」

ノランを先頭に、一行は人だかりへと近づいた。

背伸びをして人垣の間隙から覗いてみると、重ねた木箱の前に、ふたりの男性がいる。

ひとは、ベレー帽を被った若い男。

もうひとは、茶髪を三つ編みにしたロングコートの男だ。

「さあさあお立会い！ こちらにおわしますのは応用魔法学のパイオニア！ ネイクス大陸を震撼させた伝説の研究者！ ハイゼンベルク・アルノルド教授にございます！」

「これより皆様に前人未到の研究成果をお見せしましょう！」

三つ編みの男が声を上げ、傍らに置いた大きなリュックから木造りのエッグスタンドを取り出し、木箱の上に置いた。

「まずご紹介するのは、こちら。『ボイルドエッグメーカー』です！」

三つ編みの男が言うと、若い男は籠から卵を出して、エッグスタンドの中に入れて蓋をした。

「この中に卵を入れてちょっと待てば、あら不思議。いつの間にか、ゆで卵ができちゃうんです！ はい、数分経ったものがこちら」

若い男は、新たにひとつ『ボイルドエッグメーカー』なるものを木箱に置いて蓋を開けた。中に入っていた卵は、湯気を立ち昇らせている。三つ編みの男が殻を割ってみると、それはきちんと黄身と白身の固まった卵だった。

「いちいち茹でる必要なし。朝の忙しい時間帯に重宝すること間違いなし。この便利アイテムが今ならなんと十ルス！ 一家におひとついかがでしょう？」

どうやら男たちは、道具の叩き売りをしているらしい。

「なんだありゃ」

ノランはつまらなそうに食料の入った紙袋を持ち直した。

「胡散臭えなあ。あんな確かめようがないんだから、最初からもうひとつのスタンドにゆで卵入れといただけじゃねえのかよ。……なあみんな、とっとと行こー」

と言いかけて、ノランは「うっ」と口をつぐんだ。

というのも、叩き売りを見つめるノアが「なんだかすごい！」というふうに、キラキラと瞳を輝かせていたからだ。

「まあまあ。まだ時間に余裕あるし、ちょっとだけでも見ていこうぜ」

ノアの表情にいち早く気づいていたネックは苦笑して、ノランの肩を叩いた。

「続いてはこちら。『調光機能付きランタン』です」

またも三つ編みの男が言うと、若い男は今度はリュックからランタンを取り出した。

「こちらのランタン、この小扉のマークに触れると、ひとりでに火が点きます。数度触れると、弱、中、強と、火力も調整することができるのです！」

若い男は説明通りにマークに触れ、ランタンに火が入ること、その火を調節できることを実践してみせた。

これには見物客も驚きの声を上げる。「素敵……！」と声を上げるリアムの横で、ノアも小さく拍手をした。

「火事の心配なし！ マッチ必要なし！ こちらおひとつ八十ルス」

「ううん、ちと高えなあ……」

最初の疑念はどこへやら、そう言ったのはすっかり興味を惹かれているノランである。

その感想は見物客もまた同じだったようで、購入者は現れない。

三つ編みの男は「これもお気に召さない？ ならばとっておきを……」と言って、腰に吊っている小さなバッグから、何の変哲もない石を取り出した。

「なんだ、とっておきって。ただの石ころじゃん」と、ノランが呟く。

若い男は、道端に落ちてそうなその石を大事そうに掲げ、

「このアイテムの名は『ヒートストーン』。説明はあとから、ともかくこちらをご覧ください」

それから若い男が、水を張ったブリキのバケツを木箱の上に置いた。

「そちらのお嬢さん、バケツに指を入れてみてください」

「わ、わたし……？」

三つ編みの男に促されたノアが、瞳を輝かせたまま、ドキドキしながらバケツに指を入れる。

「間違いなく、水ですね？」

「は、はい……」

ノアの頷きを確認し、三つ編みの男はにこりと笑って、

「では、このバケツの中に『ヒートストーン』を入れてみましょう」

ぽちゃん、と石をバケツに入れた。

バケツの水に変化が現れたのは、石を入れて二分が経った頃だ。底に沈んだ石からぽつぽつと気泡が出始め、時間と共にその規模がどんどん大きくなり、やがて「ぼこっ、ぼこっ」と水が沸き始めた。

おお～っ、という歓声が上がった。

「薪よさようなら！ これを入れて数分待つだけで湯沸かし！ それが『ヒートストーン』！」

若い男がバッグを逆さにして、木箱の上にざあっと数十個の『ヒートストーン』を出した。

「こちらがなんと今なら、一個たったの五ルス！ 今日のお茶を一杯我慢すれば、一生お湯には困りませんよ～！」

「え、欲しい……」ぽろり、とリアム。

そしてその呟きが引き金になったように、

「ひ、ひとつくれ！」「俺にも！」「私にも！」「俺はふたつ、ふたつくれ！」――

見物客が次々に手を挙げる。

「はいはい、いっぱいありますからみなさん落ち着いて」と、三つ編みの男がそれを嬉しそうになだめた。

「うーん……。いったいどうやったんだろうな？」

殺到する客たちの少し後ろで、ノランが首を捻る。

「手品か？」

ノランが顎に指を当てて考える。「いや。モノにエレメントを付与しただけだろ」

すぐにネックが答えた。

そして――騒然とするこの場にありながら、その一言を聞き逃さなかった人物がいる。

「そろそろ時間だ。学生寮に行こう」

そう言って、ネックが踵を返そうとした時。

「そこの少年、待ちたまえ」

そこにいる数十人の中から、まるでネックひとりを狙って正確に射られた矢のような声だった。

「？」